

「その手は桑名の焼きはまぐり」

桑名市長(三重県)

伊藤徳宇



はじめに

桑名市は、三重県の北部、名古屋市の中心部から約25kmの圏内に位置する人口約14万人、面

積は136・68km²の都市です。

伊勢湾へと流れる木曾川・長良川・揖斐川の三大河川の最下流部にあり、これらの河川に沿って広がる平野部や、養老山地から連なる多度山など、水と緑豊かな、恵まれた自然環境のもと発展してきました。

本市は、近鉄名古屋線JR関西本線が並行して走り、桑名駅を基点として、岐阜県大垣市へつながる養老鉄道や、いなべ市へつながる三岐鉄道北勢線といった鉄道があり、地域の公共交通の拠点としての役割を担っているとともに、東名阪自動車道や伊勢湾岸自動車道、国道1号や23号、258号などの広域幹線道路が市内を通っており、インターチェンジが5カ所あり

ます。地理的優位性の高さから中京圏や関西圏のみならず、全国各地からもアクセスがしやすい交通・交流拠点となっております。

東海道42番目の宿場町「桑名」

「その手は桑名の焼きはまぐり」、だじやれの元祖ともいわれるこの洒落言葉は、江戸でも桑名の焼き蛤がいかにも有名だったかを物語っています。『東海道中膝栗毛』の弥次郎兵衛・喜多八も、桑名でこの焼き蛤を肴に酒を飲んでいきます。

東海道42番目の宿場町である桑名は、旅籠の数では隣の宮宿に次いで多い宿場

でした。その理由としては、宮宿と桑名宿の間が近世東海道で唯一の海路、船での行程であったため、天候不良などで船が出ないこともあり、船待ちのため



昔は枯れた松かさなどを燃やしながら焼いた桑名の名物「焼きはまぐり」



海上七里を船に乗り、渡しに着いたことから「七里の渡」と呼ばれていた「七里の渡跡」



ユネスコ世界無形文化遺産への登録を目指す「石取祭」

の宿が多かったことによります。渡し場の跡は、三重県指定史跡「七里の渡跡」となっています。ここには、伊勢神宮へ参拝する人が、伊勢国に入って最初にくぐる鳥居ということ、「伊勢国一の鳥居」と呼ばれています。最初に鳥居が建てられたのは天明年間といわれており、昭和の初めごろからは、伊勢神宮の式年遷宮に合わせて、20年に一度建替えており、昨年多くの市民の熱意により実施されました。今建っている鳥居は、内宮宇治橋の鳥居として20年間使用されていたもので、その前は外宮正殿の棟持柱だった御用材になります。

「本物力こそ、桑名力。」

このように、江戸時代において東海道の宿場町として栄えた桑名の歴史的位置付けは、古代にまでさかのぼります。古代の日本における最大の内戦とされる「壬申の乱」では大海人皇子、後の天武天皇が桑名を拠点として、戦いに勝利しました。吉野を出た天武天皇は、持統天皇らとともに伊賀国を経て伊勢国に入り、桑名に一時留まります。そして、持統天皇を桑名に残し、自身は不破関へと向かうのです。中世には「十棗の津」とも称されたほど繁栄した港であり、これは木曾三川の河川交通と伊勢湾

を行く海上交通の結節点という地理的特性によるものでしょう。古代から現在にいたるまで、桑名は東西交通の要衝であり続けています。そして、江戸時代

一口メモ

に宿場町・城下町として栄えた桑名の町衆の祭りが、今も続く日本一やかましい石取祭です。「桑名石取祭の祭車行事」として国重要無形民俗文化財に指定されており、今年の秋には全国の山・鉾・屋台の祭りとともにユネスコの世界無形文化遺産への登録を目指しています。

これまで挙げた、焼き蛤・七

里の渡跡・石取祭など、桑名には全国に誇れるブランドが多数あります。今、「本物力こそ、桑名力。」をキャッチフレーズに桑名ブランドのPRを行っていきましょう。東海道の宿場町であったことも、ブランドの一つと言えるでしょう。これら桑名の本物を全国に発信し、桑名ファンが増えるよう取り組んでまいります。

東海道

徳川幕府統治の道

東海道



東海道の名称の由来は、古代の律令制国家の行政区域に由来する。

街道としての歴史は、徳川家康が慶長6年(1601年)に定めた宿駅制度に始まる。江戸日本橋から京の三条大橋までの間の宿場ごとに53回の荷物の継ぎ替えを行ったことから、「東海道五十三次」と呼ばれた。

桑名は慶長6年に徳川四天王の一人である本多忠勝が入封し、大規模な築城と城下の整備が行われ、「七里の渡し」の築港工事も完成。本多氏が播磨へ転封後は、久松松平家が入封。途中奥平松平家を経て、幕末まで桑名藩を統治した。

企画協力…全国街道交流会議「街道交流首長会」